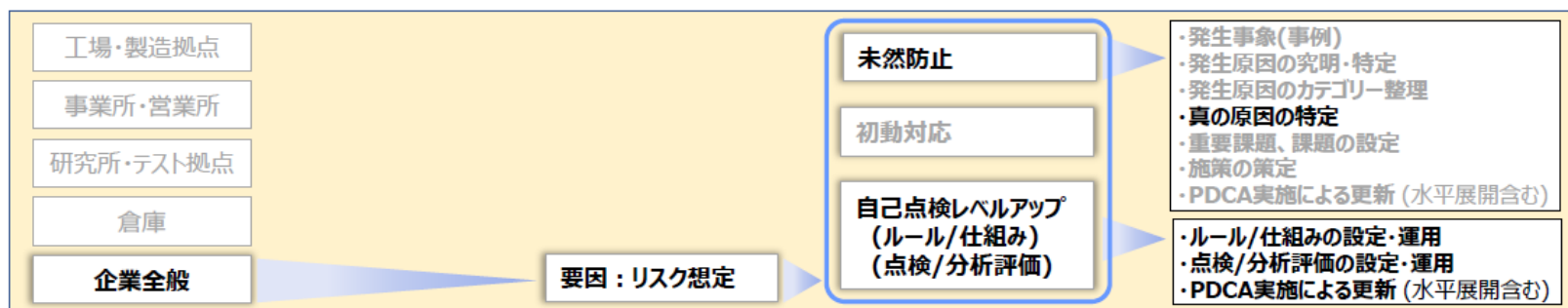
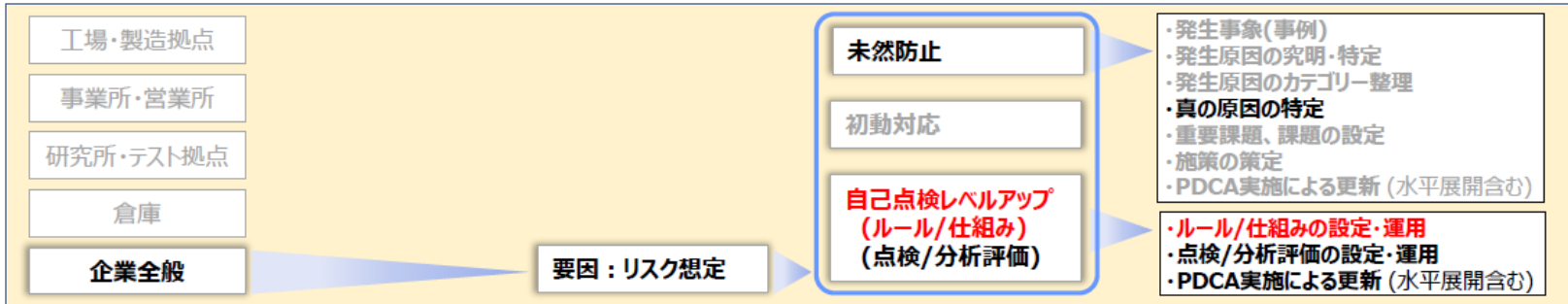


リスク状態の把握と活用 1/4

- 本資料には以下のガイドを表示しております。
- その目的は火災発生場所・要因、ならびに対応範囲を明示するものです。
- 本事例では、企業全般におけるリスク規程に対し、未然防止と自己点検を取り上げており、各ページの記載事項はガイドに赤字で示しております。



リスク状態の把握と活用 3/4



プロセス②：火災リスク低減方法の策定・評価

発生の可能性		確実に起きる	可能性が高い	可能性がある	ほとんど起きない	リスクレベル	定義
		a	b	c	d		
リスクの大きさ	重大災害・重症	I	A	A	B	C	重大問題あり
	軽傷	II	B	B	C	D	許容できる
	軽微な災害	III	C	D	D	E	対策不要

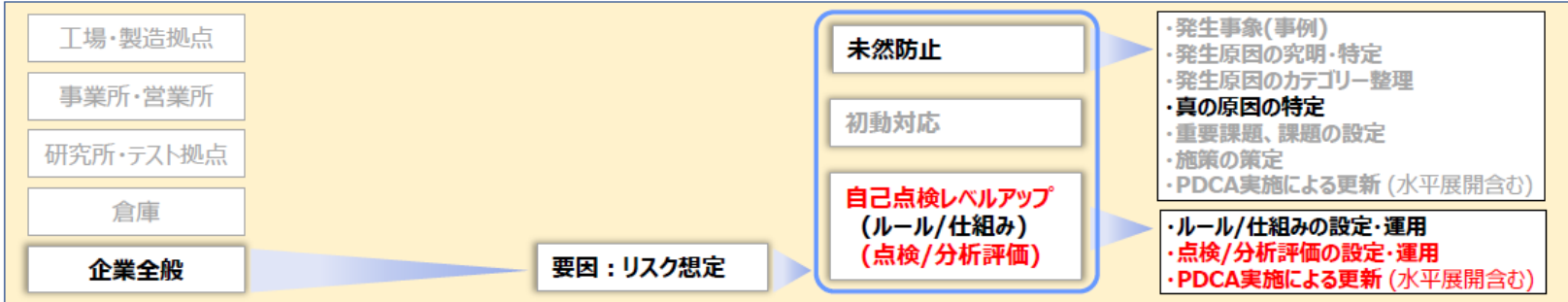
- ・社内リスクの「物差し」を用いてリスクを評価
- ・火災発生原因の究明・特定および対策実施後の評価に使用し、客観性や妥当性を確認する

<左の例>

- ・「リスクの大きさ」と「発生の可能性」を層別
- ・交点をリスクレベルとし、定義付けを実施

共通の物差しを用い、洗い出した発生源のリスクレベルを全員で共有、対策の重み付けを行う

リスク状態の把握と活用 4/4



プロセス③：対策前後のリスク評価

対策前のリスク評価			
リスク内容	リスクの大きさ	可能性	リスクレベル
ダクト内部に堆積していた研削粉や埃などに火花が引火し、ダクトが燃焼する	Ⅱ	b	B

・発生した事象を「物差し」を用いてリスク評価



対策後のリスク評価				
対策内容	リスクの大きさ	可能性	リスクレベル	妥当性
<ul style="list-style-type: none"> ・社内規程に基く定期点検の実施 ・集塵機ダクトの難燃性素材適用 	Ⅱ	c	C	○

・対策内容についても同じ「物差し」でリスク評価
 ・リスクレベルが下がったかの妥当性を確認

対策前後のリスク評価結果から次のアクションを決定する